普陀洛山六波羅密寺は六道の西にあり、真言宗にして智積院に属す。本尊十一面観音は立像長壹丈、空也上人の作なり。〔西国十七番の札所、又洛陽観音巡の其一なり〕伝に曰、村上帝御宇天暦五年に、疫癘流行て死るもの数しらず、空也上人これを憐給ひ、十一面観音の像を作りて車に乗、洛中を自身牽ありき給ふ、是当寺本尊なり。観音に供ずる典茶を疫人にあたへ給へば、一同に平癒す。村上帝これを聞召して吉例とし、毎歳元三に服し給ふ、万民今に此例を行ふて名を王服と号し、年中の疫を免るゝとなり。北の方は地蔵尊を安置す。〔いにしへは此尊像を本尊として六波羅の地蔵堂と号す。康頼の宝物集に曰、東山に貧き女ありけり、年来此地蔵尊を信じける、此女に年老たる母を持たりける、あるとき老母死してけり、いかゞして葬んと案じ煩ひ居たりける程に。ある日夕暮行脚の僧壹人出来て、何事にかくは歎き給ふと問ければ、事の仔細をありのまゝにかたりける。僧これを最易ことにこそ侍るなれとて、ひし〳〵としたゝめ背にかき負ふて山へおくり、其営し給ひけり。此女■しさいふばかりなし、これは則六波羅の地蔵の為給へると思ふて、参りて拝し奉りければ、地蔵の御足に土打つけてぞおはしましける。夫よりして此地蔵をば山をくりの地蔵とも、御手に老母の鬘を持て居給へば、かづらかけの地蔵とも号しける〕

南の方は薬師仏を安置す、伝教大師の作なり。開山堂は空也上人自作の像あり。姿見池は上人こゝにて姿をうつし自像をきざみ給ふとぞ。